



あすなろ大学 特別公開講座月間

第2回

12月13日(金) 13:30~15:30
「この命の限り - 戦後74年目の引揚げ記録」

発表:あすなろ大学 小林静子 進藤正昭 成嶋ちえ子 森千恵子



カット絵:李淵植著・館野哲訳 『朝鮮引揚げと日本人』 (株)明石書店 2015年から

手記「この命の限り」は、戦後北朝鮮から引揚げた桜井静子さん（当時22歳）によって、帰国後すぐに認められたもので、主人公の義理の弟で、あすなろ大学の受講生だった桜井泰さんの自宅に保管されていたものです。私たち（発表者）がそれを読む機会を得たのが令和元（2019）年、戦後74年目のことでした。

昭和20（1945）年8月15日の日本敗戦のとき、民間人、軍人を含め約660万人の日本人が、現在の日本領土の外にいました。終戦後、それらの人々が一斉に日本領土内に引き揚げて来たのですが、特に旧ソ連軍の占領下にあった満州、北朝鮮、樺太、千島からの引揚げは凄惨を極め、多くの悲劇を伴うものでした。

桜井静子さんは終戦前、夫と一緒に北朝鮮側に住み、ほどなく生まれて来る赤ん坊との3人の生活を楽しみにしていました。しかし、たまたま夫が京城（現ソウル）に出張中に終戦となつたため、妊娠5ヶ月の身重だった静子さんにとって、夫の支えのない過酷な引揚げの始まりとなつたのです。

ソ連兵や現地住民による略奪や性暴力に怯え、38度線越えの失敗、監禁、強制移動。そして飢餓や伝染病などで次々と死んでいく引揚者集団の中で、静子さんは究極の決断を迫られます。このまま現地にとどまるか、今や臨月となった身ひとつで京城に向かうか。

母となる女性の強さと決断。幸運と情けある人たちとの稀有な出会いによって、二つの命がつなぎとめられた貴重な体験が綴られています。

これを読んで感動し、この話を皆に聞いてもらおうと私たちは、令和3（2021）年10月15日、あすなろ大学の講座として発表しました。しかし、コロナ禍のために公開とすることはできず、残念ながら一般の方には聞いてもらえませんでした。

来年は戦後80年を迎えます。そして世界の中で戦火が絶えない今日現在、あらためて平和の大切さを噛みしめていただきたく、公開にして再度発表することにしました。

会場:東地区文化センター第1集会室

参加無料（申込不要）、会場に直接お越しください